群馬県立
前橋東高校

進学実績の向上

生徒の進路意識の涵養と教師の指導力向上で「進学型総合学科」を実現

◎普通科高校として開校、2010年度で創立31年目を迎える。2003年度から学年進行で総合学科へ改編。「知と愛と和と」を校訓とし、夢の実現に向けてたくましく挑戦し続ける生徒の育成を目指す。文武両道を校是とし、過去にバドミントン、卓球、柔道、空手道部の4部が全国制覇を果たした。

設立
1979（昭和54）年

形態
全日制・単位制／総合学科／共学

生徒数
1学年約240人

10年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、山形大、群馬大、宇都宮大、茨城大、東京海洋大、新潟大、信州大、山梨大、金沢大、富山大、大阪大、神戸大などに63人が合格。私立大は、学習院大、中央大、法政大、明治大、同志社大、立命館大などに延べ334人が合格。

住所
〒371-0002　群馬県前橋市江木町800

電話
027-263-2855

Web Site
http://www.gsn.ed.jp/gakko/kou/maehigasi/

変革のステップ

背景
◎志望校は県内の大学に偏る傾向に。教師側の進路指導の経験不足もあり、進学実績が頭打ちになっていた　STEP 1

実践
◎「産業社会と人間」で進学意欲、土曜補習で基礎学力の向上を図る。「志望校検討会」などで教師の指導力向上を目指す　STEP 2

成果
◎生徒の進学への意識が高まり、国公立大合格者が過去最高を記録。教師間の意思疎通が進み、結束力が強くなる　STEP 3

進路指導のノウハウの蓄積がなく挑戦する心を育てられない

群馬県の中南部にある群馬県立前橋東高校は、進学重視の全日制総合学科の学校だ。2003年度に総合学科に改編以来、毎年40人～50人前後が国公立大に合格してきた。しかし、08年度に赴任した山口和士教頭は、生徒の志望先が限られており、高い視点で力を伸ばし切れていない現状にもどかしさを感じていた。

「生徒は素直で学力も高く、教師もまじめで一生懸命でしたが、より高い目標に進む意欲は双方とも希薄でした。生徒の多くが国公立大志望としつつも、その内実は本人も保護者も『県内の国公立大で十分、それが無理なら県内の中堅私立大に』というものでした。これまでの経験から、本校の生徒なら全国の国公立大に100人は入れるのではと歯がゆい思いでした。進路指導は学年主導で、担任は生徒や保護者の希望に沿う形で指導を行うため、視野を広げ、高い目標に挑戦しようという意欲までは引き出せていませんでした」

特に課題に感じたのは、進路指導に関する教師の経験とデータ不足だ。進路指導室には使われた形跡のない資料がたくさんあり、模試や入試のデータは学年団で管理していたため、進路指導部として十分な蓄積がなかった。群馬大と偏差値が10も差がある県内の私立大を併願とす

る生徒に、適切な指導が出来ない状況だった。

生徒も教師にも力はある。進路指導のノウハウが足りないだけならば、発想の転換と現状分析に基づいた工夫で学校を変え、生徒の力を伸ばすことが出来るようになるのではないか。この思いが、改革の出発点となった。

「産業社会と人間」「進路プランニング」で生徒の進学意欲を高める

改革に当たり、同校が意識したのは総合学科の特徴を最大限に生かすことだ。総合学科は科目選択の幅が広いため、生徒それぞれの選択を尊重しつつ、大学合格実績を上げるには工夫が必要となる。

まず、1年次必修の「産業社会と人間」を活用することにした。社会や大学についての調べ学習を通して、調査能力や課題発見・解決能力を高め、進学意欲の向上を目指す「進路プランニング」というプログラムを推進した。

「進路プランニング」は、①大学・企業見学、②進路講演会、③オープンキャンパスへの参加、④体験講義の四つの体験学習から成る。1年次の終わりには「私の進路プラン発表会」として、体験学習を基に自分の夢について、パソコンを使ってプレゼンテーションする。ポイントは、1年間かけて大学や企業について調べ、働くことの意味などを考えさせながら、2年次以降に選択する科目と進路との関連を調べさせていることだ。進路指導主事の奥田直紀先生は次のように述べる。

「本校の生徒は、早々に少ない科目で受験する安易な道を選ぶ傾向にありました。大学入試について深く考える前に科目選択をしてしまうため、志望校を決める段階になって必要な科目を履修していないと分かり、志望校を変えざるを得ないという生徒もいました。自分の夢を実現するための大学・学部はどこか、そこに入るために必要な科目は何かということにまで視野を広げさせることで、学びへのモチベーションを高めると共に、幅広い進路選択の可能性を担保できると考えています」

普通教科の中でも生徒の学力をもっと伸ばせるのではないかと、山口教頭は考える。

「例えば、進学指導では、一般的に保健体育や家庭基礎などの科目は重視されにくい状況にあると思います。しかし、入試でもよく取り上げられる高齢化問題や環境問題といった今日的な課題は、それらの教科に内包されます。一見、受験には関係ないと思える教科から理科や現代社会への興味につながり、小論文対策ともなり得るのです。総合学科でも少し発想を変えれば、授業の中で生徒の力をもっと伸ばせると考えています」

6教科の土曜補習で全学年に学校で学習できる環境を確保

進路意識の醸成と並んで重要なのは、言うまでもなく基礎学力の向上だ。同校では全校を挙げての土曜補習で、その実現を図っている。

「本校の生徒は、学校への信頼度が高く、自ら学習に取り組む姿勢は弱いものの、与えられた課題には素直に取り組みます。自主的な家庭学習はもう一歩ですが、生徒の多くが大学進学を希望している。であれば、我々の

群馬県立前橋東高校校長
吉田シヅエ Yoshida Shizue
教職歴28年。同校に赴任して1年目。県教育委員会指導主事、藤岡女子高校校長、太田高等養護学校校長を歴任。「Nothing venture, nothing gain.」

群馬県立前橋東高校教頭
山口和士 Yamaguchi Kazushi
教職歴31年。同校に赴任して3年目。「新しい時代を拓くために、生徒に日々勇気を与え、指導していきたい」

群馬県立前橋東高校
奥田直紀 Okuda Naoki
教職歴24年。同校に赴任して5年目。進路指導主事。「生徒の話によく耳を傾け、啐啄同時の大切な時期を逃さないような指導を心掛けたい」

群馬県立前橋東高校
菅原直紀 Sugawara Naoki
教職歴22年。同校に赴任して4年目。進路指導部進学主任。「生徒の高い進路希望の維持と実現のため、主体的・自主的な活動姿勢を育成したい」

図　2010年度「進路プランニング」の流れ

夢の実現へ向けて（志望大学合格）

ジャンプ

夢への挑戦
- ◎受験科目と受験情報の確認・対策
- ◎課題研究（高校生活総集編としての論文作成）
- ◎小論文（問題意識・表現力の構築）

3学年　進路プランニングⅢ
自己実現志向の発展　「総合的な学習の時間」の活用

ステップ

社会で求められる力の認識
「科目選択を考える」コンセプトの下、自身の進路と選択する科目との関連を調べる。社会で必要とされる力を知る。
- ◎科目選択を考える
- ◎受験科目調べ（第1志望大への道の確認）
- ◎オープンキャンパスへの参加（本物を知り・未来を見る）
- ◎進路講演会（将来に向けての確認）
- ◎体験講義（大学の先生方の授業体験、現実を見る）
- ◎小論文（大学の個別学力試験を知る）

2学年　進路プランニングⅡ
自己実現志向の伸長　「総合的な学習の時間」の活用

ホップ

可能性の探求
社会や大学について調べ、体験学習を通して、働くことの意味を考える。2年次に夢の実現に必要な科目選択が出来る素地をつくる。
- ◎科目選択を考える
- ◎大学見学（早期の目標設定のために）
- ◎企業見学（大学の先の社会を展望）
- ◎進路講演会（将来へ向けての指針）
- ◎「私の進路プラン」発表（さまざまな進路プランに触れる）

1学年　進路プランニングⅠ
自己実現志向の育成　必修科目「産業社会と人間」の活用

＊学校資料を基に編集部で作成

するべきことは一つ。きちんと学習できる環境を学校内に確保することです」（山口教頭）

土曜補習は原則全員参加で、正課に準ずる取り組みだ。毎週土曜日、午前中に3コマを使って補習に取り組み、午後は部活動を行う。対象教科は国・数・英・理・地歴・公民の6教科で、いずれか3教科を各1コマ、週ごとにローテーションを組む。すべての学年で、出席率は毎回9割を超える。

土曜補習を導入したのは3年前だが、当初はさまざまな困難があった。

「どの生徒にとっても重要な教科で基礎力を付けることを目的として、1、2年生の英語で始めました。ただ、英語科の中でも土曜に補習を行うことに疑問を抱く教師は多く、更に部活動との兼ね合いもあったため、教師間で共通認識をなかなか持てませんでした。しかし、話し合いを繰り返しながら補習の体制をつくっていったところ、英語の成績が伸び始めたのです。これを契機に、教師が手を掛けて生徒を伸ばすことの重要性を実感でき、学校全体で補習に取り組もうという共通認識が持てました」（奥田先生）

保護者からも「1教科のためにわざわざ登校させるのはもったいない」という意見が出てきたことから、08年度には国・数・英の3教科に拡大、09年度には理・地歴・公民も追加し、今年度には3年生も加えて、全学年体制で土曜補習を実施している。

ただ、保護者の後押しがあったとはいえ、越えなければならないハードルはいくつもあった。まず、生徒を全員参加にすることに対する部活動顧問の懸念については、午前中は学習させ、午後は部活に専念させる、大会や遠征がある場合はそちらを優先させるなど、部活動と補習のすみ分けを明確に行い、両立することで了解を得た。

また、部活動にかかわる出張者が大勢いた場合、補習を担当する教科の教師をどう確保するかという問題もあった。各教科に理解を求め、学年を超えて、教科で全学年に対応するという方策で解決を図った。吉田シヅエ校長は、その思いを次のように語る。

「困難はありますが、それに負けていたら前には進めません。本校には、部活動にも懸命に取り組む生徒が多くいます。子どものために学習も部活動も頑張れるような環境を整えるのが、私たち教師の役目だと思います」

「志望校検討会」での成功体験を通じ教師の指導力が向上

生徒の進路意識の向上、基礎学力の定着と並んで重要なのは、教師の指導力向上だ。鍵になる取り組みは、「志望校検討会」と「教科ヒアリング」である。

それまでの「志望校検討会」は、生徒の成績に応じて最終的な志望校を絞り込む会議になっていたが、08年度から生徒の可能性を広げる場に一新した。初年度は、進学校での指導経験がある教師が会議を主導。240人の生徒一人ひとりを年数回検討し、併願校の選び方、推薦入試やAO入試での合格可能性、生徒の伸びしろの見極めなど、検討会の進め方を実践してみせた。2年目からは学年団主導に移行したが、前年の経験者若干名を3年次に残すことでノウハウの継承を図ることも忘れなかった。

「昨年、偏差値が及ばない東京の国公立大を志望した生徒がいました。検討会では受験させるかどうか意見が割れましたが、結果的に、徹底的に指導し、AO入試にすべてをかけることに決まりました。模擬面接や『進路プランニング』での大学研究を通じて、生徒は力を付け、見事合格を勝ち取りました。この経験によって、我々の指導で十分に国公立大を狙える、力が伸び悩んでいる生徒でも指導次第で高い目標を実現できるという自信を、先生方は持てたと思います」（山口教頭）

「成功体験」を通して成長するのは、生徒だけではないのだ。

「教科ヒアリング」で教師同士が自由に語り合う

10年度から実施している「教科ヒアリング」も、教師の指導力や意欲を高める上で欠かせない取り組みになりつつある。吉田校長が、7月に通常の教科会議の時間を利用し、教科担当者を一堂に集めて教科の課題を共有し、今後の解決策について自由に語り合う場を設けた。

一般的に、こうした会では教師が委縮して発言が滞る場合が多いが、若手教師も積極的に発言するなど、予想以上に活発な意見交換がなされたという。物理担当として理科の「教科ヒアリング」に出席した進路指導部進学主任の菅原直紀先生は、次のように取り組みを評価する。

「先生方にはそれぞれ胸に秘めた思いがあったものの、それを発信する機会がなかったのだと思います。ヒアリングでは3年生に対する指導が議題の中心になりました。1、2年次の先生方も参加することで、来年、再来年に向けての現在の指導方針・指導法を確認すると共に、教科全体で3年生を支援していこうという意識も生まれたと思います。また、自由に語り合う体験を通して、教師間の風通しも良くなり、職員室などでの日常的な情報交換も活発に交わされるようになりました」

改革から3年。その成果は国公立大合格者数の増加にも表れている。09年度入試では東北大を含む55人が合格、10年度入試では大阪大、新潟大医学部を含む63人まで伸び、普通科時代を含めて過去最高の実績となった。更に、教師の意識も大きく変わった。

「誰かが一声掛ければ、すべての教師が迅速に動くというフットワークの良さが出てきました。過去3年間、土曜補習の是非などで議論を交わしてきたことが、結果的に教師の結束を強めたのだと思います」（奥田先生）

今後の課題は、教師間、分掌間の力を結びつけ、「組織として機能する学校」へと進化させていくことだと、吉田校長は話す。

「先生方は皆、能力が高くまじめです。しかし、個々の取り組みが『点』で終わってしまっては、効果は限定的になってしまいます。教師、教科、分掌が有機的に結びつくことで、組織全体の力が高まると考えています。『志望校検討会』や『教科ヒアリング』などを通して、先生方は組織的に動くことの大切さを実感し始めていると思います。個々の取り組みの効果を更に高めるためにも、先生方の力を結集して、機能的な組織を構築していきたいと考えています。それが実現できたとき、本校は大きな躍進を遂げると信じています」

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2010年6月号指導変革の軌跡「**大分県立日田三隈高校**」など
▶▶▶ ***http://benesse.jp/berd/*** → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）